



友愛の森(二中だより)

10月号



学校教育目標

二中文化を創造する生徒

わかる授業の創造・認め合える学級の創造・共に高め合う学校の創造

令和元年10月30日発行

私たちが住みたくなるまち“富士宮”～富士山学習卒業発表会～

校長 渡 邊 一 衛

10月25日（金）に富士山学習卒業発表会が行われました。3年生にとっては、これまで追究してきたことをまとめ、聞いている人に分かりやすく伝える機会となりました。1、2年生にとっては、3年生の発表を聞き、富士山や地域についての知識を深めたり、自分の課題追究に生かしていったりする機会となりました。午前の部では、12会場に分かれ、3年生一人一人が発表を行い、保護者や地域の皆様、4名の区長様（浅間区 井口晴道様、神田区 村島哲夫様、城山区 秋山章明様、宮本区 遠藤光弘様）も参観してくださいました。午後の部では、全体会が行われました。

全体会では、まず、**3の2 星野愛さん**が「リピーター増加計画in富士宮」という課題について、伊勢神宮、熱海との比較を通して、
・お土産がたくさんあること
・駐車場が多くあること
・カフェなどの休憩場所があること
の3つのポイントを挙げ、温泉施設を充実させていくという主張をしました。

その後、「私たちが住みたくなるまち“富士宮”」をテーマに、パネルディスカッションを行いました。パネラーは、**3の1 福山理紗さん、3の2 小泉友暉さん・望月さくらさん、3の3 黒野真花さん・勢村萌花さん・藤中太雅さん**の6人。パネラーは自分が追究してきた課題を通して、「自然環境」「湧水」「地産食材」「お茶」「スポーツイベント」「SNS」等の活用など具体策を掲げていました。司会の**3の1 小林将也さん、3の2 小野田慎さん**のスムーズな進行のもと、フロアーの生徒からも意見が出され、富士宮の将来について、中学生なりの考えを、自分の言葉で表現できていました。

午前の部の1コマ。

3の2 後藤七海さんの発表。課題は「富士宮を活性化させるために、自分たちができることは何だろう」。七海さんは、富士宮市が今以上に人通りが多くなって、賑わう町になるためにどうすればよいかを、静岡市と比較して、自分の課題を追究していききました。その中で、
・駅の存在
・商店街の規模
・人口の多さ
・商店街の個性
という4つの面から、富士宮市の問題点を洗い出し、富士宮市の活性化について、中学生の自分たちができることとして、「富士宮のよさを知り、それをたくさんの人に広めていく」という提案をしました。

その発表に対し、参観をしてくださっていた**神田区長 村島哲夫様**から、
・少子高齢化の問題
・観光客の動線
・大型店舗と個人商店の関係
・外国人観光客への対応
などの面からご意見をいただきました。そして、最後に、村島様から「若い人たちから魅力ある提案をたくさんしてほしい」という激励の言葉もいただきました。

中学生の課題追究、そして、そこから生み出された主張について、地域や保護者の皆様からご意見をいただくことで、さらに、深い学びにつながっていくだろうことを、体感した時間となりました。

これからの時代を生き抜いていく子どもたちにとって、自ら課題をもち、その課題解決のために、様々な情報を取捨選択し、分析・解釈し、それを根拠として、自分の主張を作り上げ、他に発信していく力を付けていくことは、重要なものになっていくと考えます。二中文化として継承されてきた富士山学習は、まさにその力を付けていく学びの核となります。

今後も、よりよい学びとなるよう、子どもたちを支援していきたいと思います。

全校生徒が「BEST」を合い言葉に…

希翔祭「運動の部」が終了した日に、メール配信で保護者アンケートを募りました。その日のうちに非常に多くの保護者の皆様から回答を頂きました。「子供たちの頑張る姿に感動しました。」「応援が素晴らしかった。」「胸が熱くなりました。」「互いを讃え合いBESTを尽くしていました。」といったお言葉を多数頂きました。以下は大会運営に携わった生徒の感想です。



希翔祭実行委員長
生徒会長 黒野 真花 (3-3)

スローガン「BEST」のもと、早い段階から委員長や学年委員を中心に準備や練習に全力を尽くしていたので、とてもよい過程を踏んで本番を迎えることができました。

希翔祭は「文化の部」を決めることで、成功となり、次の世代へとバトンタッチすることができます。**ZEN**の力を出し切り、一人一人が真に「楽しい!」「最高!」と思ったとき「成功」と言えると思います。

希翔祭「運動の部」
実行委員長 篠原 貴哉 (3-2)

生徒会本部、委員長、応援団、そして、何より、全校生徒の皆さんが希翔祭「運動の部」に向けて準備をしていただき、本当に感謝しています。自分が一番感動したのは、みんなの「成功させたい」という気持ちを感じた時でした。

次は、「文化の部」です。順位が出ない分、より良いものを創ることを意識して「BEST」を尽くそう!

総団長 眞 伊吹 (3-1)

自分は、1年生からずっと応援団で活動をしてきました。今年からは応援のほぼ全てが変わり、本番まで何度も繰り返し練習を続け、それでもうまくいかないことばかりでした。しかし、本番では演舞が決まり、多くの人にも喜んでもらえたと思います。

応援団の活動は大変ですが、その分達成感も味わえます。来年はさらに、レベルアップさせ、運動の部を盛り上げてください。

赤軍応援団長 四條 来郁 (3-1)

1年生から応援団を続けてきた中で、今年の応援は、3年間で一番盛り上がったと思います。このような応援をすることができたのは、振り付けを指導してくれた先生方や一緒に頑張ってくれた、1・2年生のおかげだと思います。本当に感謝しています。

やりがいのある応援団に入り、是非、来年はもっともっと盛り上げて下さい。

白軍応援団長 佐野 伊吹 (3-2)

白軍は赤軍、青軍よりも「元気」と「声」だけは負けたくないと思い、色別集会や朝の練習、全校練習などで「声で負けるな!」と、何度も叫ぶように言ってきました。本番では最高に声が出て良かったです。

今回一番うれしかったことは、各軍が新たな振り付けに真剣に取り組み、楽しく盛り上げることができたことです。

青軍応援団長 木内 英輝 (3-3)

「全校で一番輝く青軍」をめざし、応援団の活動をしてきました。色別応援も最高に良かったと思いますが、自分が一番感動したのは、どの競技でもみんなが応援席から精一杯の声援を送る姿でした。このような声援を送る応援の姿を「二中文化」の一つとして、今後はさらにレベルの高い応援にしていって下さい。

生活習慣にも「二中文化」あり!

雨の日には生徒が傘をさして登校しますが、右の写真は本校の昇降口にある傘立ての様子です。先日来校されたお客様から、「二中生の品格をあらわしていますね。」とお褒めの言葉をいただきました。傘のボタンがしっかりと留められて、傘立てに整然と入っています。これまでの小学校や御家庭での指導の賜もありますが、二中生の習慣にも「文化」を感じます。

